

見える障害と見えない障害

一宮市立萩原小学校六年

岩田 麻宏

ばくのおばあちゃんは六十一才です。そんなおばあちゃんが二年前、大変なことになってしまいました。それは、骨に腫瘍ができて、痛みで全く歩けなくなってしまったのです。それまでは、自転車も乗れるし、歩行もなんなくできていました。それがある日、とつ然、「足が痛いよう。」

と言出し、痛みで歩けなくなってしまいました。幸い、動かなくなっただのは片足ですが片足だけでは歩けないので車いす生活となってしまいました。

入院中、ばくはお見舞いに行きました。そうしたら、病室に車いすが置いてあったので、ばくは、興味本位でその車いすに乗ってみました。車いすに乗る前は、簡単にそうさができて、ミニカー感覚で楽に乗れると思っていました。以前、車いすに乗っている人を見たことがあります。その人も簡単そうに乗っているように見えました。しかし、いざ乗ってみると、とても難しく、特に難しかったのは、曲がることです。片方のタイヤを止めないといけないので、その感覚がつかめなく、うまく曲がれませんでした。車いすに乗ってみて、簡単そうに見えても、乗っている人は苦勞して、せまい所も通れないからすごく大変なのが分かりました。

では、車いすに乗っている人の気持ちはどうでしょう。車いすに乗っているおばあちゃんに聞きました。おばあちゃんは、

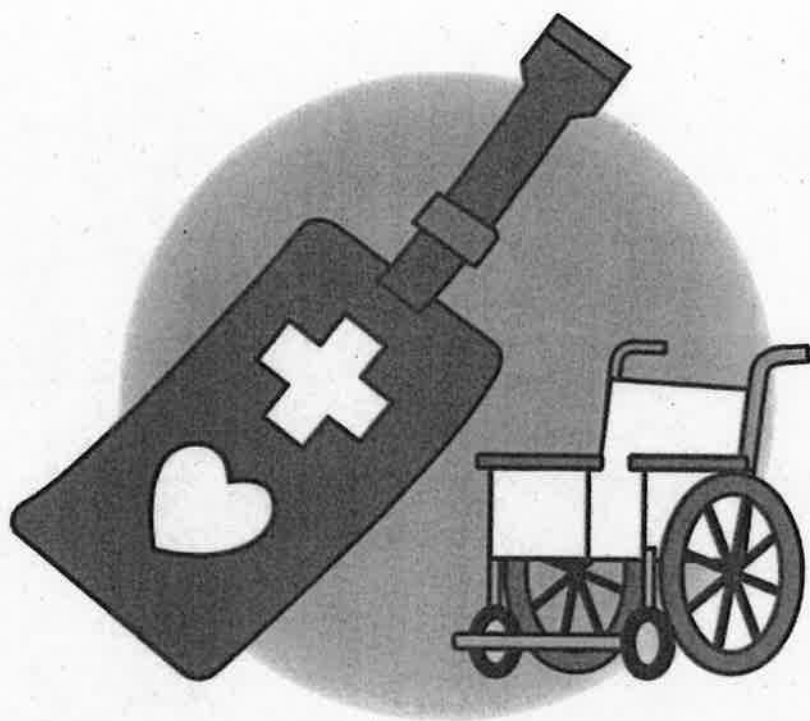
「私はまだ病院内だけの行動だから、大丈夫だけど、それでも、おどろいたことがあったよ。よそ見をして歩いている人がいて、ぶつからないかあせったことがあったよ。」

と言っていました。車いすだと、ぶつかりそうになってもすぐによけることができないうので、危険だということが分かりました。このことからばくは、車いすの人を見かけたら、できるだけ通りやすいように道をあけてあげることや、よそ見をせずに車いすの人が安心して運転ができるように周りも気を付けることが大切だということ学びました。

おばあちゃんは人工の骨を入れる手術をしました。リハビリをして、今では少し足を引きずっているけど歩けるようになりました。けれど、長時間立っていたりするとまだ痛みが出るそうです。

この間、おばあちゃんは電車に乗りました。その時は、席があいていなくて立ちっぱなしになってしまつて、足が痛くなつてきたので、辛かつたと言っていました。もし、ばくが席にすわっている人の立場だったら、足が悪い人が来たなら席をゆずると思います。どうして席にすわっていた人はゆずらなかつたのでしょうか。それは、おばあちゃんのように、足が悪いのか見た目では判断できない人に対して、すわっている人はそれに気付くことができずに席をゆずれなかつたんだと思います。おばあちゃんの病気は見た目では分からないので、周りの人からの援助や理解が得られにくいのです。

この間テレビで、名古屋駅で「ヘルプマーク」を配る活動をした、というニュースを見ました。ばくは「ヘルプマーク」というものを、それまで全く見たことも聞いたこともありませんでした。「ヘルプマーク」とは、外見からでは障害があるか分からない方々が、周りに援助や配慮を必要としていることを知らせることで援助を得やすくするマークです。障害は見た目だけではないことを周りが理解することで、差別の目を向けることがなくなると思います。おばあちゃんもこの「ヘルプマーク」を付けていたら周りが気付いて手助けしてくれていたかもしれせん。



でもこのニュースを聞くまで、ぼくも知らなかったから、知らない人が多いのが現状だと思います。せっかくだいいマークがあるのにみんなが知らなければ意味がないと思います。だから、たくさんの人に知ってもらうことが大切だと思います。そのためにぼくは周りの人に教えたいと思います。そして多くの人に伝えられていけたらいいと思います。